

## 第2部

### 先生を慕って

#### 15世紀朝鮮語活用語幹の構造形態論と生成形態論

##### —安秉禧An Byeongheuiアン・ビョンヒ(1959/1957)を中心に

崔明玉 Choe Myeongog チェ・ミョンオク (ソウル大名譽教授)

【訳者注】文法用語は一部を除いてできるだけ筆者のものをそのまま用い、中期朝鮮語の語形には、筆者の注記を除いて、一切日本語訳をつけなかった。

### 1. 緒論

安秉禧(1959)は構造主義言語学の形態論(以後「構造形態論」と呼ぶ)の標本といえるNida(1949)の理論を15世紀朝鮮語に最もよく適用した朝鮮語形態論研究の論文である。この論文の優れたところはその後刊行された朝鮮語史概説、中世朝鮮語文法論、中世朝鮮語形態論の著書や論文がその研究の結果をほとんどそのまま受容しているという点で立証される。

そしてこの論文が発表された後から今まで15世紀朝鮮語活用語幹の形態は許雄HeoUngホ・ウン(1975: 444-475)で扱われたことがあるが、その内容は大部分の語幹末形態音素についてのものであって、活用語幹の形態素設定についてのものではない。この点で許雄(1975: 444-475)は安秉禧(1959)の研究内容と研究方式を受容していると言うべきである。それ故安秉禧(1959)は依然としていかなる反論の対象とはならなかった。そして20年が過ぎた後に安秉禧(1978)として刊行された。そして再び40年という歳月が過ぎた。その期間にただ1つ朴龍燦Bag Yongchanパク・ヨンチャン(2016)が安秉禧(1959/1978)を中心として15世国語活用語幹の形態論的交替の様相について論じたものがあるのみである。ところがその内容は15世紀国語活用語幹の形態論的な問題についての論議ではなく、音韻論的な問題についての論議である。この点で安秉禧(1959/1978)についての反論はなかったと言えよう。

このように歳月が流れる間、言語学界には変形=生成文法論(以後変形文法論と呼ぶ)が登場し、言語研究の版図を変えたと言って変形文法論もそれ自体の変化を

繰り返した。そうするうち初期にその枠にはなかった生成形態論が登場した。しかし生成形態論の領域はほとんど単語形成 (word formation) に限定されるので、生成形態論を受容した朝鮮語研究者たちは朝鮮語の共時形態論の領域に該当する活用と曲用の語幹と語尾の形態論には関心を持たず、いまだに持っていない。朝鮮語で活用や曲用で発生する諸現象はすべて共時的現象である。これらの現象についての研究は形態論に限定するものではない。語幹形態素や語尾形態素の統合で発生する形態音素の交替を研究することは音韻論の所管であり、曲用語尾形態素と活用語尾形態素の文法的機能や意味特性を明らかにすることは通時意味論の所管である。それ故朝鮮語の通時意味論のためには形態論で形態論の固有の所管である活用語幹と曲用語幹、そして活用語尾と曲用語尾の形態素を設定してやらなければならない。

筆者は先に安秉禧(1959/1978) (以後安秉禧(1978)と呼ぶ) が構造形態論を最もよく適用したものだと言った。しかし変形文法論的観点から見ると、そこにはいくつかの問題がある。共時現象と通時現象の区別が明確でないこと、形態素の設定についての論議がないということ、語彙化した異形態を持つ形態素の表示がうまく行っていないということがこれに当たる。この論文の題目は安秉禧(1978)が持つこれらの問題を変形文法論的な観点から論ずることによって構造形態論と生成形態論との関係を明らかにし、朝鮮語形態論を継承、発展させることである。

この点に留意しつつ、この論文ではまず2で安秉禧(1978)が持つ共時現象と通時現象の問題について論ずる。次に3で安秉禧(1978)のII.2. (単純語幹) とIII (体言の活用語幹) で発見される問題について論じ、生成文法論の観点から15世紀国語活用語幹の形態素設定と語彙化した異形態を持つ形態素表示、すなわち複合形態素について論ずる。終わりに4では2と3で論じた重要な結果を整理することによって結論を導くこととする。

## 2. 共時現象と通時現象の区別の問題

安秉禧(1978)は15世紀国語活用語幹についての共時的形態論であるが、その中には共時的なものと同時的な物が混ざっている。言い換えるならば、IIの2 (単純語幹) , 3 (派生語幹) , 4 (複合語) とIII (体言の活用語幹) で、IIの2とIIIは共時的な物であるが、IIの3と4は共時的なものではない。それ故IIの3と4を共時的な物と扱ったのは適当ではない。そうではあるが、それは研究者の誤りではない。なぜならば、構造形態論がそのようにしているからである。

しかし構造形態論が派生語や合成語を対象に形態を分析し、異形態を求めて形態素を設定することをその領域としているといっても、朝鮮語の派生語や合成語の形態分析は朝鮮語の活用形や曲用形についての形態分析のような共時的な言語事実についてのものではないということにははっきりしている。朝鮮語の場合活用形や曲用形についての形態論を共時形態論というならば、派生語や合成語を対象とする形態論は共時形態論ならぬ通時形態論とするべきであろう。その点で朝鮮語の共時形態論に構造形態論を批判的に受容できなかったのは研究者の責任であり、その研究の結果について今までいかなる見当もなかったということは後学たちの責任といえよう。

では安秉禧(1978)からIIの3と4がどうしても共時的なものではないかを探ることとする。まず派生語について論ずるIIの3を見ることにする。ここで論議の対象となる派生語は活用語幹に (1) 使動の派生接尾辞,<sup>1)</sup> (2) 被動の派生接尾辞, (3) 状態を表示する派生接尾辞, そして (4) その他の接尾辞が統合して形成されたものである。

そのうち (1) の論議の内容を整理すれば、次の如くである。使動の派生接尾辞には①“-이- -i-”と②“-오- -o-”があるが、これらの派生接尾辞は、明示されていないが、各々の異形態に ‘-이- -i-, -기- -gi-, -히- -hi-, -ㅣ- -i-’ と異形態 ‘-오- -o-~ 우- u-, -호- -ho-’ の形態素である。論議を“-이- -i-”の異形態によって派生した使動の派生語幹に限定すれば、形態素“-이- -i-”の異形態のうち「語幹末音が ‘ㄹm, ㄹm, ㄴs’ ならば ‘-기- -gi-’, ‘ㄷ, ㅁb, ㅅj (一部の‘ㅅj’), ‘ㄴnj’ なら ‘-히- -hi-’, それ以外の子音なら ‘-이- -i-’ が連結する。そして ‘ㅇ’ を除く母音で終る語幹には ‘-ㅣ- -i-’ (ただし ‘ㅍre, ㄹru’ 末音節ならば ‘-이- -i-’) が連結する) いう。これは語幹と使動派生形態素“-이- -i-”の異形態の連結条件である。そして叙述語語幹と“-이- -i-”と異形態が統合した派生語幹各々について活用形を提示することで論議は終わる。いくつかの例を示せば次の如くである。

- “주기-jugi-”( <죽-jug-死 ): 주기거나 jugigəna, 주기디jugidi, 주길씨니jugir-ssini, 주기수 다투니jugizeβenira, 주꿀jugyur, 주규려커늘jugyuryəkənur
- “더러히-dərəβi-”( <더릴-dərəβ-穢 ): 더러히거나dərəβigəna, 더러히니dərəβinəda, 더러힐씨|dərəβir-ssəi, 더러뵤들dərəβyumur, etc.

上の論議を変形文法論的観点から検討すれば、次の如くである。まず使動派生接尾辞“-이- -i-”が異形態 ‘-이- -i-, -기- -gi-, -히- -hi-, -ㅣ- -i-’ を持つとした。このうち ‘-ㅣ- -i-’ を異形態と見たのは正しくない。 ‘-ㅣ- -i-’ は ‘헤-hei- ( <헤-he-爲 ), 내-nai-

(<나-na-出), ㅅ-*boi*-(<보bo-見) 等のような表記形で分析しただけであって、形態としては ‘-이- *i*-’ と同一のものだからである。そうすると、使動派生接尾辞 “-이- *i*-” の異形態は ‘-이- *i*-, -기- *gi*-, -히- *hi*-’ となる。そうならば異形態 ‘-이- *i*-, -기- *gi*-, -히- *hi*-’ が形態素 //*-이- i*// から導き出されるのをどう説明し得るのか？ この質問に対する答えを簡単に理解するために異形態を共通部分を基準として束ねれば ‘-{ $\emptyset$ , ɾg, ㅎ} | *i*-’ となる。ここで { } の中のものは形態素 //*-이- i*// の形態素 // $\emptyset$ // で実現された交替音素となる。そうならば // $\emptyset$ // が /ɾg/ や /ㅎ/ に交替するのをどう説明し得るのか？ 説明は不可能である。// $\emptyset$ // が /ɾg/ や /ㅎ/ となり得ないからである。そしてもう一つの重要な問題は、前に叙述したように、形態素を設定することが構造形態論の領域ではあるが、この研究には形態素設定についての論議がないという点である。

この点を考慮しつつ、安秉禧(1978)Ⅱの3(1)の内容を変形音韻論の観点から見ることにする。前に叙述したように、使動詞は能動詞の語幹に使動派生接尾辞が統合して形成される。それ故使動詞の形態分析で能動詞の語幹形態素を明らかにするならば、その使動詞が共時的な語形成過程を経るのかどうかを知ることができる。そうするためには最小限の活用形を分析して形態素を設定する必要がある。形態素設定に必要な最小の活用形は //*ㄷd*// や //*ɾg*// で始まる語尾と統合するものと //*어a*// で始まる語尾（この語尾がない場合は //*으u*// で始まる語尾）と統合するものである。このような条件を前提としてまず(1)をみよう。

- (1) ア. 더러히-*dərəβi*-(<더럴-dərəβ-穢): 더러히다 *dərəβida* <月釋 18: 69a>, 더러히거나 *dərəβigəna* <月釋 21: 39b>, 더러히다 *dərəβyə* <月釋 15: 14b>, 더러히며-*dərəβimyə* <月釋 15: 79a>(g-1)  
 カ. 더러이-*dərəi*- (穢): 더러이디 *dərəida* <法華 7: 9a>, 더러이고저 *dərəigojyə* <楞嚴 1: 37a>, 더러여 *dərəyə* <法華 4: 18b>, 더러이며 *dərəimyə* <月釋 11: 112a><sup>2)</sup>

(1ㄱ)の活用形は統合関係と系列関係を基準(今後活用形の形態分析はこの基準を適用する)とすれば、各々 ‘더러히-디 *dərəβi-di*, 더러히-거나 *dərəβi-gəna*, 더러히-어 *dərəβi-ə*, 더러이-며 *dərəβi-myə*’ と分析され、その結果語幹形 ‘더러히-어 *dərəβi-*’ が抽出される。この語幹形は交替形を持たないから、(1ア)の語幹形態素が //더러히-*dərəβi*-// ということを知ることになる。この語幹はまた ‘더러이-*dərəβ-i*-’ と分析されるが、それは次に提示された能動形の活用形で ‘더러히-*dərəβi*-’ の能動詞語幹形



態素が //더럽-dərəβ-//であるということを知ることができるからである. すなわち能動詞の活用形は ‘더럽고dərəβgo<月釋9: 24a>, 더럽디dərəβdi<月釋2: 5 5b>, 더러비dərəβæ<釋詳24: 50ㄴ>, 더러븜dərəβumyə <月釋7: 18a>’ であるが, これらの活用形を分析すれば, 各々 ‘더럽-고dərəβ-go, 더럽-디dərəβ-di, 더럽-이-dərəβ-i-, 더럽-으며-dərəβ-umyə’ と分析される. 従って (1ア)の語幹形態素 //더러비-dərəβi-//が共時的語形成によって形成されたものであるとするならば, その過程は次の如くである. [[더럽dərəβ]<sub>[動]</sub>이]<sub>[+使動]</sub>- ⇒ 더러비-dərəβi-.

ところで同じ時期に (1ア) と同一の意味を持つ (1カ) が共存している. (1カ) の活用形 ‘더러이디dərəidi, 더러이고져dərəigojyə, 더러여dərəyə, 더러이며dərəimyə’ は各々 ‘더러이-디dərəi-di, 더러이-고져dərəi-gojyə, 더러이-어dərəi-ə, 더러이-며dərəi-myə’ と分析される. その結果語幹 ‘더러이-dərəi-’ は交替を示さないで, それ自体が形態素 //더러이-dərəi-//となる. この形態素は (1ア) と同じく能動詞 ‘더러-dərə-’ に派生接尾辞 ‘-이- -i-’ が統合して合成されたと言える. ところでこの時期の朝鮮語には上に提示したように, 能動詞 ‘더럽-dərəβ-’ は存在するが, ‘더러-dərə-’ は存在しない. そうならば使動詞 //더러이-dərəi-//の形成を能動詞 //더러-dərə-//に派生接尾辞 ‘-이- -i-’ が統合して合成されたものという説明は認められ得ない. 可能な説明は ‘[[더럽dərəβ]<sub>[動]</sub>이]<sub>[+使動]</sub>-’ の過程を経て ‘더러비-dərəβi-’ が合成された後に ‘ㅁ>w’ の変化を経て ‘더러이-dərəi-’ のなったとするものである. この説明が適当ならば, 使動詞 //더러이-dərəi-//の形成は共時的な物ではない. 逆に能動詞 //더러-dərə-//が存在しないから, //더러이-dərəi-//を ‘더러-dərə-’ と ‘-이- -i-’ として分析するのは適当ではない.

使動詞の派生が共時的な語形成の過程によるものではないということを立証し得るもう一つの証拠がある. 一般的に使動詞派生接尾辞 ‘-이- -i-’ が統合して派生する場合は語卷末の子音音素や流音音素が派生接尾辞 ‘이 i’ の初声に移動する. ‘다수리-daseri- (<다 술-daser-理), 드리-duri- (<들-dur-入), 머기-məgi- (<먹-məg-食), 브타-burti- (<블-buut-附), 저히-jəhi- (<짚-jəh-畏)’ 等がそれに属する. ところでいわゆる ‘ㄷ’ 変格用言語幹や ‘르ru’ 変格用言語幹, そして ‘ㄹru’ で終る一部の語幹等は語卷末音素が派生接尾辞 ‘-이- -i-’ の初声に移動する. (2)でそのような事実を知ることができる.

(2)ア. 들어-duur’i- (<들-duud-聞): 들어고duur’igo<圓覺下2-1: 49a>, 들어디duur’idi <月釋19: 99b>, 들어며duur’yə<釋詳13: 4b>, 들어면duurimyən<月釋11: 21b>

カ. 올이-or’i- (<오-ore-登): 올이고or’igo <月釋 25: 38b>, 올이니or’ineni

<三綱,孝: 32b>, *올여 or'iyə*<법화 1: 10a>, *올이니 or'ini*<杜初 10: 38a>

サ. *빌이-bir'i-*(<빌-bir-借): *빌이건마른 bir'igənmaren*<杜初 25: 41a>, *빌이누다 bir'inəda* <杜初 23: 19a>, *빌여 bir'yə*<杜初 7: 20 a>, *빌이샤 bir'sya* <月釋 19: 24b>

(2ア-サ)の活用形を分析すれば, 各々 (2ア)は '들이-고*dur'igo*, 들이-디*dur'i-di*, 들이-어*dur'i-ə*, 들이-면*dur'i-myən*'となり, (2カ)は '올이-고*or'i-go*, 올이-느니*or'ini*, 올이-어*or'i-ə*, 올이-니*or'ini*'となり, (2サ)は '빌이-건마른 *bir'igənmaren*, 빌이-누다 *bir'inəda*, 빌이-어 *bir'i-ə*, 빌이-샤 *bir'i-sya*'となる. 分析された語幹が '들이-*dur'i-*, 올이-*or'i-*, 빌이-*bir'i-*'は交替形がなくて, それ自体が形態素 //들이-*dur'i-*//(2ア), //올이-*or'i-*//(2カ), // 빌이-*bir'i-*//(2サ)となる. (2ア)の活用の類型に属する動詞には //같이-*gir'i-*//(<갈-gid-汲), //물이-*mur'i-*//(<물-問)があり, (2カ)の活用の類型に属する動詞には //놀이-*nur'i-*//(<누르-nuru-壓), //얼이-*ər'i-*//(<어르-*ərū*-嫁), //걸이-*gər'i-*//(<거르-*gərū*-滯, 瀧)がある. そして (2サ)の活用の類型に属する動詞には //굴이-*ger'i-*//(<굴-*ger*-磨), //놀이-*nor'i-*//(<놀-遊), //놀이-*ner'i-*//(<놀-*ner*-飛), //덜이-*dər'i-*//(<덜-*dər*-減), //들이-*dur'i-*//(<들-*dur*-擧), //말이-*mar'i-*//(<말-勿), //몰이-*mor'i-*//(몰-驅) 等がある.

ところでこの時期 (2カ)と (2サ)の使動詞の類型に属するものに使動詞派生接尾辞 '이'が '리'となったものがある. //놀이-*nurri-*//, //홀리-*hurri-*//(<흐르-*hurū*-流), //물리-*murri-*//(<므르-*murū*-退) 等と //물리-*murri-*//(<물-*mur*-報) 等がそれに属する. これらの使動詞は前の時期に各々 //블이-*bur'i-*//, //홀이-*hur'i-*//, //물이-*mur'i-*//と //몰이-*mr'i-*//だったことは上に提示された (2カ)と (2サ)の活用の類型に属する動詞との対照において容易に知ることができる. 言い換えるなら, これらの使動詞の語幹 //X리-*ri-*//は, //X리-*r'i-*//で見ると, 舌側音音素 //r// の後ろで //이//を独自に発音しようとするところから来る難しさを避けるための方法として //r//を挿入したものである. それは (2ア)のr う異形に属する '물이-*mur'i-*//(<물-*mud*-問)を除くすべての語幹が, //들리-*durri-*//(<들-*duud*-聞), //올리-*orri-*//(<오르-*ore*-登), //놀이-*nurri-*//(<누르-壓), //빌리-*birri-*//(빌-借), //놀이-*norri-*//(<놀-*norri*-遊), //놀이-*ner'i-*//(<놀-*ner*-飛 //말리-*marri-*//(<말-*mar*-勿)で見ると, //X리-*ri-*//の構造に変わった事実から知ることができる.<sup>3)</sup>

(1)の例を含めて, このような変化が知らせてくれる重要な事実は派生接尾辞によって新しい語幹が形成される時, その派生接尾辞は語幹の一部がたわんで派生接尾辞としての独自性を喪失するということである. (1カ)の //더러이-*dərai-*//は元来 //더러히-*dəreβi*//で 'ᄃᆞ'が 'w'に変わることによって形成されたものである. このような変化は派生接

尾辞 ‘-이--i-’が派生接尾辞としての独自性を失い、語幹の一部となったために可能なのである。そうでなくて ‘-이--i-’が共時的な語形成の機能を持っていたならばそのような変化は決して起こり得なかったであろう。 ‘//홀이-hur’i-//(<흐르-huru-流)>’と ‘//몰이-mur’i-//(<몰-mur-報)>’が ‘//홀리-hurri-//’と ‘//몰리-murri-//’に変わったのも語幹の末音節 //이i//が語幹の一部となった為である。

それ故 (2ア-サ)の使動詞や各々の類型に属するすべての使動詞も共時的語形成の規則によって形成されたのではない。従ってそれらの使動詞についてもその内部構造を分析することは共時的な現象についてのものと見ることはできない。

状態標示派生接尾辞のよる派生も(pp. 65-75)共時的語形成の過程によるものではないことを (3)の例で知ることができる。

- (3)ア. ①그립-guriβ- (<그리-guri-慕): 그립거나 gurribgəna<月釋 22: 37b>, 그립은 gurribum<月釋 17: 15a>, :ᄃ, 그립우물 gurriumur<法華 5: 161a>
- ②두립-duriβ- (<두리-duri-畏): 두립더니duribdəni<月釋 7: 5b>, 두리버 duriβə <月釋 14: 76a>, 두리뵤며 duriβumyə<月釋 12: 35b>, 두리워 duriuə <法華 3: 174a>, 두리우며 duriumyə<法華 2: 81a>
- カ. ① 잇브-isbu- (<잇-ic-困): 잇브게 isbugəi <楞嚴 3: 9a>, 잇브다 isbuada<楞嚴 5: 23b>, 잇버도 isbədo<杜初 18: 21b>, 잇브면 isbumyən<楞嚴 3:14a>
- ②골꺾-gorpe- (<꺾-gorh-飢): 골꺾고 gorpego<月釋 22: 50b>, 골꺾과 gorpa<月釋 20: 43a>, 골꺾며 gorpemyə<月釋 22: 31b>

まず (3ア)と (3カ)を見ることにする。安秉禧(1978: 66-68)は (3ア)の語幹は派生接尾辞 ‘-ᄃ--β-’によって形成されたものであり、(3カ)の語幹は派生接尾辞 ‘-ᄃ--βu-’によって形成されたものであるとする。このような説明は構造形態論の観点から見ると、問題となることはない。それらの接尾辞は表面形の分析から抽出されたものだからである。しかし表面形態は深層構造の形態素から導き出されるものであるという変形文法論の観点から見れば、子音音素だけから成る ‘ᄃβ’を形態や形態素とするのは適当ではない。朝鮮語で形態や形態素は最小限1音節以上から構成しなければならないが、音節を構成しようとすれば必ず母音音素がなければならない。その点で子音音素だけから成ることを形態や形態素と見るのは正しくない。例えば、‘컹도 kədo’(大)や ‘(편지를pyənjirur[手紙を]) 쓴 ssun[書いた](사람saram[人])’(書)を形態分析すれば、‘-ᄃ어도k-ədo’や ‘-ᄃ-ᄃssu-n’から成る語幹 ‘-ᄃ-k-’や語尾 ‘-ᄃ-n’が抽出される。しかし ‘-ᄃ-k-’や ‘-ᄃ-n’を語幹や語尾の形態や形態素とすることはできない。これとは異なる

り、変形文法論の観点から見れば、それらの深層構造すなわち形態素は各々 ‘ $\text{ㄱ-kw-}$ ’や ‘ $\text{-은un}$ ’である。

‘ $\text{-ㄹ-β-}$ ’と ‘ $\text{-ㄴ-n-}$ ’についても変形文法論の観点から見れば、その2つは 区別されるものではない。接尾辞 ‘ $\text{-ㄹ-β-}$ ’と ‘ $\text{-ㄴ-βw-}$ ’は各々母音音素で終る動詞語幹と子音音素で終る動詞語幹と統合する。その点で2つの接尾辞の分布は相補的である。このことは2つの接尾辞が同一の形態素から分化して出てきたものだとすることを意味する。具体的に言えば、(3ア)と(3カ)の語幹は各々(4ア)と(4カ)のような語形成の過程を経て作られたものである。

- (4) ア.  $[[\text{XV}]_{[+動]} \text{ㄴ-βw}]_{[-動]}-$   
 カ.  $[[\text{XC}]_{[+動]} \text{ㄴ-βw}]_{[-動]}-$

このように合成された語幹はそれ自体の形態構造と音韻環境に会うように変化したものと見える。すなわち(4ア)の場合、接尾辞  $[[\text{ㄴ-βw}]]$ の  $[[\text{은un}]]$ は動詞の語幹の後ろで脱落し、‘ $\text{XV ㄹ-β-}$ ’に変わる。そして(4カ)の場合、接尾辞  $[[\text{ㄴ-βw}]]$ の  $[[\text{ㄹ-β-}]]$ と  $[[\text{은un}]]$ は各々動詞の語幹末子音音素が [+無声性]を持てばその後ろで  $[[\text{ㄹb}]]$ に変わり、語幹末音節の母音音素が [+陽性性]を持てば  $[[\text{은e}]]$ に変わる。

そうして動詞  $[[\text{미-mui-}]]$ (憎)は  $[[[\text{미 mui}]_{[+動]} \text{ㄴ-βw}]_{[-動]}-$ ’の過程を経て状態動詞 ‘ $\text{미ㄴ-βw}$ ’として形成した後で、‘ $\text{파라ㅎ-parahē-}$ ’が‘ $\text{파랑-parah-}$ ’に変わるように、語幹末母音音素  $[[\text{은un}]]$ の脱落を経て  $[[\text{미ㄴ-muiβ-}]]$ に変わった。そして動詞  $[[\text{웃-uz-}]]$ (笑)は  $[[[\text{웃 uz}]_{[+動]} \text{ㄴ-βw}]_{[-動]}-$ ’の過程を経て状態動詞 ‘ $\text{웃ㄴ-uzβw}$ ’として形成された後にいかなる変化も経なかった。しかし動詞  $[[\text{믿-mid-}]]$ (信)は  $[[[\text{믿mid}]_{[+動]} \text{ㄴ-βw}]_{[-動]}-$ ’の過程を経て状態動詞  $[[\text{믿ㄴ-midβw}]]$  に変わった後に  $[[\text{ㄴ-βw}]]$ がその前の  $[[\text{ㄷd}]]$ が持っていた [+無声性]に同化することによって  $[[\text{믿ㄹmidβw}]]$  に変わった。一方動詞  $[[\text{궂-gorh-}]]$ (飢)は  $[[[\text{궂gorh}]_{[+動]} \text{ㄴ-βw}]_{[-動]}-$ ’の過程を経て状態動詞  $[[\text{궂ㄴ-gorhβw-}]]$ に合成された後に接尾辞  $[[\text{ㄹβ}]]$ と  $[[\text{은un}]]$ が各々その前の  $[[\text{ㅎh}]]$ が持っていた [+無声性]と  $[[\text{은o}]]$ が持っていた [+陽性性]に同化されることによって ‘ $\text{궂ㄴ-gorhbe-}$ ’ に変わり、再度  $[[\text{ㅎh}]]$ と  $[[\text{ㄹb}]]$ が  $[[\text{ㅍp}]]$ に縮約することによって  $[[\text{궂ㄴ-gorpe-}]]$ に変わった。

ここでまた注目しなければならない事実は、(3ア)の活用形で見ると、接尾辞の  $[[\text{ㄹβ}]]$ が派生過程を経た後でそのままである語幹では同じ15世紀に ‘ $\text{ㄹβ}$ ’とその変化である ‘ $\text{w}$ ’が共存していることでもあり、(3カ)の活用形で見ると、接尾辞  $[[\text{ㄹβ}]]$ が  $[[\text{ㄹb}]]$ になった後語幹では ‘ $\text{ㄹβ}$ ’もその変化である ‘ $\text{w}$ ’も見えな



いということである。

以上の論議で得た結論は接尾辞 ‘ $\beta$ ’ による派生とそのように形成された派生語に起こった変化が15世紀文献が刊行される以前に起こったということである。この事実はこれらの接尾辞による派生語が15世紀朝鮮語が持っていた共時的造語過程によるものではないということである。それ故このような派生語を語幹と接尾辞に分析することは共時的現象についてのことではない。

‘4.複合(=合成)語幹(pp. 75-85)’の形成も共時的な語形成過程によるものではない。次の(5)を見ることにする。

(5)ア. 셋엎-səs-ərg- (<셋-səsg-混·엎-ərg-縛): 셋엎고 səs-ərg-go<月釋 12: 30a>, 셋얼거 səs-ərgə <法華 2: 12a>

カ.①돈니-dədni-<돈-dəd-走·니-ni-行): 돈니고 dədnigo<月釋 20: 32a>, 돈녀도 dədnyədo<南明上: 50a>

②돈니-denni- (<돈니-dəd 走·니-ni-行): 돈니고 dennigo<杜初 7: 24a>, 돈녀셔 dennyəšə <杜初 11: 1a>

まず(5ア)の場合, //셋엎-səs-ərg-//は動詞語幹 //셋-səsg-(混) //と 엎-ərg-(縛)//の語幹が統合した合成語であり, 構造と意味においてすでに変化を経たものである。構造において //셋엎-səs-ərg-//の第1音節の ‘셋səs’は元来の語幹 //셋-səsg-//の語幹末子音素群のうち //ㄱ g//が脱落したものであり, 機能において副詞の役わりをする。それ故 //셋엎-səs-ərg-//は ‘섞어서 엎-səgg-əsə ərg-[混ぜて縛る]’の意味を持つ。活用形で見ると, //셋엎-səs-ərg-//は交替形を持たない。それ故それ自体が形態素となる。言い換えれば, //셋엎-səs-ərg-//は共時的には一つの形態素であり, 通時論的には2つの形態素 //셋-səsg-//と //엎-ərg-//が統合したものと説明することができる。従って //셋엎-səs-ərg-//は共時的に語形成過程を経て形成されるのではなく, それを //셋-səsg-//と //엎-ərg-//に分離すれば, それが持っている意味が失われる。それ故合成語の内部構造を分析することは活用形を分析することとは異なるという点で共時的なものではない。

次に(5カ)の場合, この時期に2つの語幹 ① //돈니-dədni-//と ② //돈니-denni-//が発見される。語幹 ①と ②は同じく動詞語幹 //돈-dəd-// (走)と //니-ni-// (行)が統合して形成された合成語である。語幹 ①と ②は等しく ‘다니-dani-’ (歩行)の意味を持ち, 活用形で見ると, どの環境でも交替を示さない。それ故それ自体が単一の形態素とならない。それが単一の形態素であるために, それは //돈-dəd-// (走)と //니-ni-// (行)に分析すれば, 語幹 ①と ②が持っている ‘다니-dani-’ (歩行)の意味は失われる。そして ②の語幹 //돈니-denni-//は ①の語幹

//ㄷㄴ-dædni-//で第1音節の //ㄷ d//が第2音節の頭の //ㄴ n//が持っていた [+鼻音性]に同化したものである。このように語幹形が変形したので、②の語幹 //ㄷㄴ-dænni-//はそれ以上分離し得ない。この事実は②の語幹が当時の実際の語幹であり、①の語幹は読者の理解を助けるための表記法による語幹だということを知らせてくれる。それ故(5ㄴ)の合成語は共時的な語形成過程によって合成されたものではない従って合成語の内部構造を記述することは共時的現象についてのことではない。

今までの論議を総合すれば次の如くである。15世紀朝鮮語において派生語幹や合成語幹は共時的語形成過程によって形成されるものではない。それ故15世紀朝鮮語の活用語幹に付いての共時形態論でそれらの派生語幹や合成語幹はそれ自体を一つの単一語幹と同じものと認めなければならない。言い換えれば、使動詞や被動詞は正接尾辞 '-{이i, 기gi, 히hi}-'について形成された '머기-mægi-(<먹-mæg-食), 자피-japi-(<잡-jab-執)'等は '이기-igi-(勝)と同じく '이i'で終る語幹であり、使動詞派生語幹接尾辞 '-{우u, 구gu, 후hu}-'によって形成された '일우-ir'u-(<일-ir-成), 머추-mæcu-(<뎡-mæg-停)'等は '주-ju-(興)と同じく '우u'で終る語幹と見なければならない。そして状態動詞派生接尾辞によって形成された '그릴-guriβ-(<그리-guri-慕)や '믿<sup>ㅁ</sup>-midβw-(<믿-mid信)'等は各々 '믿<sup>ㅁ</sup>-muiβ-(憎)や '크'(大)のように、'ங'や '우'で終る語幹と見なければならない。また '섞<sup>ㅅ</sup>어-(<섞-sæsg-混・어-ærg-縛)'と '조심<sup>ㅅ</sup>히<sup>ㅎ</sup>-josimhe-(<조심josim操心・히-he-爲)'のような合成語幹は各々 '긔-gurg-(搔)と '히-he-(爲)のように、'ㄷrg'や '우'で終る語幹と見なければならない。

この点で安秉禧(1978)で15世紀朝鮮語の活用語幹を単純語幹や派生語幹や複合語幹と区別し、論ずることは適當ではない。<sup>4)</sup>

### 3. 15世紀朝鮮語活用語幹の形態論

2で安秉禧(1978)のうち II の 3 (派生語幹) と 4 (複合語幹) は共時的事実についての論議ではないということを明らかにした。それ故この章の論議の対象は安秉禧(1978)のうち 2 (単純語幹) と III (体言の活用語幹) となる。

この部分で安秉禧(1978)が持っている問題点は、活用語幹の形態論なのに、活用語幹の形態素設定についての論議はなしに、形態素を提示し、各形態素の異形態についての論議だけをしているということである。

形態論の本領は形態素を設定することである。それ故活用語幹の形態論は活用語幹の形態素設定が中心にならなければならない。朝鮮語の場合、筆者が考案した活用語幹の形態素の設定の順序は次の如くである。まず語幹と語尾が統合した活用形を収集する。この時収集された活用形は一つの語幹に最小限 {ㄷ d, ㄱ g, 어 ə, 으 u}で始

まる語尾が統合したものでなければならない。次にそれらの活用形の形態を分析する。終わりに分析された語幹の異形態を対象に形態素を設定する。

このような形態素設定過程は構造形態論や変形形態論で同じのものがあるが、形態素設定と形態素表示には2つの理論間に大きな違いがある。構造形態論は表面形の分析と分類にのみ関心があるので、分析された異形態の水平的関係に関係のみを考慮して形態素を決めて表示する。それ故 ‘먹꼬mæg-ggo, 명는다mænnunda, 머거서mægəsə’ (食)で分析された語幹の異形態 ‘먹-mæg-’と ‘명-mæn-’は ‘먹-mæg-’を形態素として ‘먹-mæg-’が ‘명-mæn-’になるのは子音音素同化で説明し得るので、形態素を ‘먹-mæg-’とし、/먹-mæg-/と表示する。しかし ‘살고sargo, 사니sani’(生)や ‘곱꼬gobggo, 고우니gouni, 고와서gowasə’(麗)の場合、分析された語幹の異形態② ‘살-sar-’と ‘사-sa-’や③ ‘곱-gob-’と ‘고우-gou-’で②の異形態は ‘살-sar-’を形態素とし、形態 ‘사-sa-’を導き出すことを説明し得る。しかし③の異形態はどれ一つを形態素としても他の異形態を導き出すことを共時的音韻規則として適合した説明をすることができない。このような違いにもかかわらずそれらの異形態の分布が音韻論的に決定されるために2つとも形態素は /살-sar-∅사-sa-/と /곱-gob-∅고우-gou-/と表示する。

これとは異なり、命令形終止形語尾の異形態 ‘-어라-əra, -아라-ara, -니라-nəra, -거라-gəra’の場合、異形態 ‘-어라-əra’と ‘-아라-ara’は音韻論的に決定され、‘-니라-nəra’と ‘-거라-gəra’は形態論的に決定されるので、命令形終止形語尾の形態素は/(-어라-əra∅-아라-ara)∅-니라-nəra∅-거라-gəra /と表示するか、そのうちの代表となると言い得る ‘-어라-nəra’を { } のなかに入れた {-어라-əra}を基本形(basic allomorph)として形態素を代表する。

しかし変形文法論はことばが深層構造で表面構造を経て実現されるものと見るので、このように ‘먹-mæg-’と ‘명-mæn-’は音韻部の基底形 //먹mæg-] 고go//と//먹mæg-] 는다nunda//と //먹mæg-] 어서əsə//で、提示された順序通りに各々濃音素化規則と子音音素同化規則の適用を受けて /먹꼬mæg-ggo/と /명는다mæn-nunda/となり、残りのものは規則の適用を受けず、/먹어서mæg-əsə/となったものと説明される。この場合 /먹-mæg-/と /명-mæn-/は単一異形態素 //먹-mæg-//と表示される。そして異形態 ‘살-sar-’と ‘사-sa-’は音韻部の基底形 //살sar] 고go//と //살sar] 으niuni//で、前のものは音韻規則の適用を受けず、/살고sargo/となり、後ろのものは語幹末の流音音素の後ろで語尾の頭音 ‘으u’の脱落規則の適用を受け、/살니sarni/となった後、再び語尾の頭の ‘-n’野前で御管末 ‘ㄹr’の脱落規則の適用を受け、/사니sani/となったものと説明される。それ故この場合の /살-sar/と /사-sa-/は単一形態素 //살-sar-//と表示される。

これとは異なり、異形態 ‘곱-gob-’と ‘고우-gou-’は音韻部の基底形で交替したので

はない。2つの異形態を共通部分を基準として束ねれば、‘고go{ㅁb,우u}-’となるが、{ }の中の交替音素が導き出され得る形態音素が存在しないので、2つの異形態は語彙化したものと見なければならぬ。それ故それらの異形態を包括する形態素は複合形態素 //고go{ㅁb-우u}-//と表示される。この形態素を構成する語彙化した異形態 //ㅁ-gob-//と //고우-gou-//は語彙部に貯蔵されているので、句節構造規則によって作られた基本文の「動詞, 名詞」等の各位置に語彙が挿入される時に語彙選択規則によって選択され、それが音韻部の基底形となる。言い換えれば、‘-고go,-더라-dəra’等の子音音素で始まる語尾とは‘ㅁ-gob-’が選択され、‘ㅁ-고nub-go, ㅁ-더라nub-dəra’となり、‘-으니-uni, -어도-ədo’等の母音音素で始まる語尾とは‘고우-gou-’が選択され、‘고우-으니gou-uni, 고우-어도gou-ədo’となった後で、これが音韻部の基底形 //ㅁnub] 고go//, //ㅁgob] 더라dəra//, //고우gou] 으니uni//, //고우gou] 어도ədo //となるのである。

構造形態論では単一形態素と複合形態素の設定とその表示をきちんとし得なかった。しかし変形文法論によってはじめてそのような形態素設定と表示が可能になった。そして単一形態素はそれ自体が音韻部の基底形となるのに反して、複合形態素は語彙部に貯蔵されて統辞・意味部で語彙化した子の形態が選択された後、それが音韻部の基底形となるということも知ることとなった。

### 3. 1. 形態分析と形態素設定

ここでは生成形態論を土台として15世紀活用語幹の活用形を分析して形態素を設定することにする。

ところでこの論文は構造形態論と生成形態論の関係を明らかにし、朝鮮語形態論を継承・発展させることに寄与することを目的とするので、安秉禧(1978)全般について論ぜず、該当する部分のうち一部分だけを対象として論ずることにする。

形態素設定のために必要な最小限の活用形は、2に提示したように、破裂音音素 //ㄷ d//や //ㄱ g//で始まる語尾と統合するものと //어 ə//で始まる語尾（この語尾がない場合には //으 u//で始まる語尾）と統合するものである。このような条件を土台にして活用形の形態を分析し、分析された交替形を対象に活用語幹の形態素を設定することにする。活用語幹の形態素は個別の活用語幹の活用形を分析して設定し得る。しかしそのようにしては数多くの活用語幹の形態素を一つ一つ皆設定しなければならない。ところで朝鮮語の活用語幹が単一形態素である場合は、形態素から導き出された異形態は語管末の音素だけ異なり、その残りの部分はすべて同一である。



それ故異形態を共通部分を基準として束ねれば、互いに異なる語幹末の音素だけ残るとになる。それらの音素は語幹末の形態音素から導き出された交替音素である。それ故交替音素から形態音素を設定すれば、設定された形態音素を交替音素と代替すれば、それが形態素となる。例えば、活用語幹で交替を見せる語巻末音素を除いた残りの部分をXとして語巻末音素の交替音素で設定した形態音素を// $\neg$ g//とすれば、その活用語幹の形態素は//X $\neg$ -g//となる。このように形態素の類型を設定して、その類型に属する語幹の形態素を提示すれば、個別活用語幹の形態素を一つ一つ設定しなくてもよい。

このような方法で形態素を設定する前に適用される一般原則は次の如くである。

- ア) どんな環境でも交替を示さない語幹はそれ自体が形態素となる。
- カ) 語幹が子音音素や子音音素群で終れば、その語幹の暫定形態素は活用形の語尾の初めの母音音素の前で分析された語幹と同一である。
- サ) 語幹が母音音素で終れば、その語幹の暫定形態素は活用形に語尾の頭の子音音素の前で分析された語幹と同一である。
- タ) 語尾の頭の子音音素の前で分析された語幹が母音音素で終るが、語尾の頭の// $\neg$  a//の前で分析された語幹が子音音素や流音音素で終れば、その語幹は語尾の頭の子音音素の前で分析された語幹と同一の語幹末音音素を持つ。
- ナ) 原則カ)とサ)による暫定形態素が適格な形態素となり得ない時はその2つの暫定形態素を土台にして形態素を設定するが、その場合単一形態素を設定し得なければ、それらの暫定形態素を語彙化した異形態と認めなければならない。その場合の形態素はそれらの異形態をすべて包括する複合形態素となる

15世紀朝鮮語活用語幹の形態素は大きく単一形態素と複合形態素に分かれる。単一形態素は今度は語幹末音音素が子音音素（流音音素を含む。以下同）か母音素かによって、子音音素で終る語幹形態素と母音素で終る語幹形態素に分かれる。

## 3.2 単一形態素

### 3.2.1. 子音音素で終る語幹の形態素

子音音素で終る語幹の形態素はさらに単一子音音素で終る語幹形態素と子音音素群

(流音音素を含む) で終る語幹形態素に分かれる。

### 3. 2. 1. 1. 単一子音音素で終る語幹形態素

15世紀朝鮮語の子音音素目録を構成する子音音素としては //ㅃ b, ㅈ d, ㄱ g, ㅅ j, ㅌ s, ㅎ h, ㅍ p, ㅌ t, ㅋ k, ㅊ c, ㅍ sb, ㅌ sd, ㅍ sg, ㅆ ss, ㅎ hh, ㅃβ, △ z, ㅇ', ㄴ n, ㅁ m, ㅇ ɲ, ㄹ r//がある。このうち活用語幹末子音音素として使用されるものを安秉禧(1978)で論じた順序どおりに提示すれば, //ㄱ g, ㄴ n, ㅈ d, ㅁ m, ㅃ b, ㅌ s, ㄹ r, ㅌ t, ㅍ p, ㅃβ, △ z, ㅅ j, ㅊ c, ㅎ h//の如くである。これらの子音音素で終わる語幹は活用で異形態を示さないものと一つの異形態を示すもの, 2つ以上の異形態を示すものがある。例えば安秉禧(1978: 10)で //X ㄱ-g-//類に属する ‘먹-mæg-’(食)や ‘죽-jug-’(死)は活用形で語幹の異形態を示さないものである。それ故それ自体が形態素となる。

そして //X ㄹ-r-//類に属する ‘알-ar-’(知)や ‘살-sar-’(生)は各々2つの異形態 ‘알-ar-~아-a-’ や ‘살-sar-~사-sa-’ を示す。 ‘아라 ara, 아로미 aromi, 아ㄹ시고 aresigo, 알리로소이다 arrirosongida, 아니 ani, 아ㄴ니라 anenira, 아는 anon, 아디 adi, 아수박 azebα’ や ‘사라 sara, 사로몬 saromen, 사ㄹ시고 saresigo, 살면 sarmyən, 산 san, 사니 sani, 사더니 sadəni’ 等でそのような事実が確認される。そのうちで語幹末の //ㄹ r//が脱落しない場合は「語尾の初声が母音か音節の頭音としての ‘ㄹ r’ と ‘ㅁ m’ または ‘ㄱ g’ である時」であり, 「語尾が ‘- ㄴ-n, -니-ni, -ㄴ-ne-, -ㄹ-r, -다-da, -디-di, -더-də-, -ㅎ-zəβ-, etc.’ の前では語幹末の //ㄹ r//が脱落するとしてそのような類型の語幹を列挙している(pp. 13-14)。

これとは異なり, //X ㅎh-//類に属する語幹の場合, 語幹 ‘장-jəh-’(怖), ‘낱-nah-’(産), ‘짱-jih-’(作)の異形態 ‘장-jəh-~젓-jəs-~젼-jəd-’, ‘낱-nah-~낯-nad-’, ‘짱-jih-~진-jid-’ を示し, それらの異形態を実現する活用形を提示する。そして語幹末交替音素 /ㅎh/, /ㅌs/, /ㅈd/ が実現される条件を提示した後, そのような類型の語幹を提示する(pp.19-20)。

しかしどんな場合でも活用語幹の形態素設定についての論議はない。活用形の分析で得ることとなる異形態を集合として表したりそのうちの一般的な異形態を一つ { }に入れて基本形(basic allomorph)として提示するのが構造形態論での形態素であり, 形態素表示である。

しかし上の場合を変形文法論の観点から論ずれば, 次の如くである。

#### 1 //X ㄱ-g-//類

次の(1)に提示したのは ‘먹-mæg-’(食)の活用形である。

- (1) 먹더라 mægdəra<月釋 22: 53b>, 먹고 mæg-go<釋詳 9: 22b>, 머저도 mægədo  
<月釋 1: 26b>, 머그며 mæguumyə <法華 2: 189b>

これらの活用形を分析すれば, ‘먹-더라mæg-dəra, 먹-어도mæg-ədo, 먹-으며mæg-uumyə’となり, その結果語幹の形態 ‘먹-mæg-’が抽出される. この語幹は交替形を見せないで, それ自体が形態素となる. それ故 (1)の活用を見せる語幹の形態素は //먹-mæg-//となる. 15世紀朝鮮語で //Xㄱ-g-//類に属する活用語幹の形態素は (2)の如くである.

- (2) //Xㄱ-g-//류: //귀먹-guimæg-// (饗), //녹-nog-// (融), //닉-nig-// (熟), //닉숙-nigsug-// (熟), //막-mag-// (防), //먹-mæg-// (食), //빌먹-birmæg-// (乞), //석-sæg-// (朽), //작-jyag-// (小), //적-jyæg-// (少), //죽-jug-// (死) 等 //ㄱ g//で終るすべての語幹

## 2//Xㄷ-r-//類

次の (3)は ‘살-sar-’ (生)の活用形である.

- (3) 사더라sadəra<三綱孝: 25a>, 살오저sar’ojyə<楞嚴9: 74b>, 사느니sanəni  
<釋詳13: 10a>, 사슴다가sazədaga<内訓2下: 46b>, 사라도sarado<月釋4:  
18a>, 살며sarmyə<釋詳6: 37a>, 살리라sarrira<月釋7: 12a>, 살씨니sarssini  
<釋詳9: 1b>, 사르시고sarəsi-go<法華1:193b>, 사로데i[sarodei<釋詳6: 5a>

これらの活用形を分析すれば, ‘사-더라sa-dəra, 살-오저sar’ojyə, 사-느니sa-nəni, 사-슴-다가sa-zəb-daga, 살-아도sar’ado, 살-며sar-myə, 살-리라sar-rira, 사-르-씨-니sa-r-ssi-ni, 살-오-시-고sar-əsi-go, 살-오-데i[sar’odei’となり, その結果活用語幹の交替形 ‘살-sar-’と ‘사-sa-’が抽出される. 形態素設定の一般原則[カ]を適用すれば, 語幹の暫定形態素は //살-sar-//となる. 安秉禧(1978: 14)は語幹末の //ㄷr//が脱落しない条件を「語尾の初声が母音(-아-a, -오-o-, -으시-əsi-, etc.)か音節頭音として ‘ㄷr’와oa(←과goa) ‘ㄹm’(-라-ra, -락-rag, -리-ri-, -며-myə, -면-myən, etc.)または ‘ㄱg’(-거-gə-, -계-gəi, -고-go, etc.)であり, 勿論この時の ‘ㄱg’は(←은uun)脱落する」とし, 語幹末の //ㄷr//が脱落する条件を「-ㄴ-n, -니-ni, -ㄴ-ne-, -ㄷr (音節末音), -다-da, -디-di, -더-də-, -슴-zəb-, etc.)」と見た.

しかし変形文法論の観点から見れば, そのような条件には再考されるべきことがある.

語幹末の //ㄷr//が脱落しない条件のうち音節頭音が ‘ㄷr’ と ‘ㄹm’ としたなしのいは正しくない. 語尾 ‘-라-ra, -락-rag, -리-ri-, -며-myə, -면-myən’ は子音音素で終る語幹と統合すれば, 各々 ‘머그라mægura(食)<月釋10: 25a>, 주그락jugurag(死)<釋詳30: 19a>, 머그리라mægurira(食)<月釋2: 16a>, 머그며mægumyə<法華2: 189b>, 머그면mægumyən<月釋25: 124a>’ で見るように, その前に ‘으’ がある. これを「媒介母音」または「挿入母音」とし, 語尾の一部と認めないでいるが, ‘으’ が挿入される条件を求める事が出できい. 語幹がしいのン素で終り, 語尾が子音音素で始まる時, 子音の衝突を防ぐためにその間に ‘으’ が入るとして, そのような術語が用いられたものと見える. ところで金完鎮 Gim Wangjin キム・ワンジン(1972: 275-276)で指摘したように, ‘잡-고jab-go, 잡-지jab-ji’ 等の場合は ‘으’ が挿入されない. それ故その時の ‘으’ は語尾の一部と認めなければならない. そして語幹末の //ㄷr//が脱落する条件のうち ‘ㄷr(音節頭音)’ としたのも連体形形成語尾 ‘-{을ur/을ur?, 은un}’ としなければならぬ. この場合語幹末の //ㄷr//が脱落するのは音韻論的条件によるものではなく, 子音音素群単純化によるものであり, 脱落の仕組みが異なる.

従って変形文法論的観点から語幹末の //ㄷr//が脱落する条件は ‘-[C,+前方性,+設定性舌頂性]Y, {은un, 을ur(または을ur?)}」<sub>[+連体]</sub>’ となる. ‘-[C,+前方性,+設定性]Y’ に属する語尾の頭の子音音素は //ㄴn, ㄷd, ㄷz//である.<sup>5)</sup> この条件を適用すれば, (3)の活用を示す語幹の形態素は //살-sar//となる. 15世紀朝鮮語で //Xㄷr//類に属する活用語幹の形態素は (4) の如くである. .

- (4) //Xㄷr//類: //살-sar// (生), //굴-ger// (磨換), //놀-nor// (遊), //닐-nir-// (起), //놀-ner-// (飛), //달-dar-// (熱), //덜-dər-// (滅), //돌-dor-// (廻), //들-dur-// (擧入), //덜-der-// (甘秤), //멀-mər-// (遠), //알-ar-// (知), //얼-ər-// (凍), //열-yər-// (開實), //씻-sber-// (洗吸), //염글-yəmgur-// (實), //궁글-gungur-// (空), //점글-jyəmgur-// (暮), //땡글-meinger-// (造), //갓글-gasger-// (倒), //꺾글-ganer-// (細), //감돌-gams-dor-// (廻) 等/ㄷr/で終るすべての語幹

### 3) //Xㅎ-h//類

次の (5)に提示されたのは ‘낱-nah-’(産)の活用形である.

- (5) 나타가 nataga<救方 上: 25a>, 나코 nako<月釋 10: 23b>, 난니 nanni<楞嚴 4: 23a>, 날노라 nadnora<月釋 10: 25a>, 낱수은대 nasseondai<内訓 2 上: 42a>, 나하도 nahado<内訓 2 上: 8a>, 나ㅎ며 nahemyə<月釋 2: 33 ㄴ>



これらの活用形を分析すれば, ‘*낳-다* *nag-daga*, *낳-고* *nah-go*, *난-ㄴ니* *nanmeni*, *낳-노라* *nad-nora*, *낳-스오-ㄴ대* *nas-sŏo-ndai*, *낳-아도* *nah-ado*, *낳-으며* *nah-emyŏ*’となる. その結果語幹の交替形 ‘*낳-nah-*, *난-nan-*, *낳-nad-*, *낳-nas-*’が抽出される. これらの交替形を共通部分を基準として束ねれば, ‘*나*{*h, ㄴ, ㄷ, ㅅ*}’となる. 語幹が子音音素で終わるので, 形態素設定原則を適用すれば, 母音音素で始まる語尾で分析された ‘*낳-nah-*’が暫定形態素となる.

そうであるなら語幹末形態音素 //*h*//が交替音素 /*ㄷ, ㅅ, ㄴ*/となるのは次の如く説明し得る. まず交替音素 /*ㄷ*/は //*h*//が語尾の頭の子音音素の前で平音(破裂音)音素化したものである.<sup>6)</sup> 次に交替音素 /*ㅅ*/は語尾の頭の恣意のン素の前で平音(破裂音)音素化した /*ㄷ*/が [+前方性, +歯擦性]を持った語尾の頭の //*ㅅ*//に同化したものである. 最後に交替音素 /*ㄴ*/は平音(破裂音)音素化による交替音素 /*ㄷ*/が [+鼻音性]を持った語尾の頭の //*ㄴ*//に同化したものである. しかし交替音素 /*ㄷ, ㅅ, ㄴ*/のうちどれか一つを形態音素とする時はそれが各々の交替音素となることを的確に説明することはできない. 従って (5)の活用を見せる語幹の形態素は //*낳-nah-*//となる. 15世紀朝鮮語で //*X h*-//類に属する活用語幹の形態素は (6)の如くである.

(6) //*X h*-//類: //*낳-nah-*//(産), //*{ 낳 nyəh, 낳 nəh }*//(入), //*놓-noh-*//(放), //*닿-dah-*//(接), //*닿-dih-*, //*닿-sdih-*//(搗), //*닿-bih-*//(播), //*쌓-ssah-*//(積), //*좃-joh-*//(淨), //*좃-jih-*//(作), //*좃닿-jusdih-*//(搗), //*답쌓-dabsah-*//(積), //*한숨 닿-hanzumdih-*//(嘆) 等 //*h*//で終わるすべての語幹.

ここで ‘III(体言の活用語幹)’について論ずる必要がある. 安秉禧(1978: 86)はこの語幹が3つの異形態を持つものと見て形態素を ‘-이- *i-ŏ-* | - *i-ŏ-∅-*’と表示している.

- (7) ア. *조가기시다 jogagisida*<月釋 1: 序: 16b>, *사름미라 saremira*<訓諺 3a>, *고디니 godini*<釋詳 3: 35b>  
 カ. *괴라 guira*<釋詳 13: 36b>, *전취니 jyŏncŏini*<月釋 1: 11b>, *아피어나 amoiaena*<釋詳 21: 8b>  
 サ. *불휘라 burhuira*<月釋 序: 21a>, *술위오 sur’uio*<月釋 1: 25b>, *어미로니 əmironi*<月釋 21: 55b>, *아니어늘 aniənur*<釋詳 3: 31b>

(7)に提示された活用形は次のように分析される. (7ア)は各々 ‘*조각-이-사-다* *jogag-i-si-*

da, 사<sup>ㅅ</sup>-이-라sarem-i-ra, 곧-이-니god-i-ni'と分析され, (7カ)は各々 '그-| -라gu-i-ra, 전주-| -니jyence-i-ni, 아모-| -어나amo-i-əna'と分析される. そして(7サ)は各々 '불휘-Ø-라burhui-Ø-ra, 슬위-Ø-오sur'ui-Ø-o, 어미-Ø-로니əmi-Ø-roni, 아나-Ø-어늘ani-Ø-ənur'と分析される. その結果繫辞語幹の交替形 '(N)이-i-'と '(N) | -i-'と '(N) Ø-'が抽出される. ここでこの形態 '(N)이-i-'は子音音素や流音音素で終る名詞の後ろに分布し, この形態 '(N) | -i-'は '이'や 'j' 以外の母音音素で終る名詞の後ろに分布してこの形態 '(N)Ø-'は '이'や 'j'で終る名詞のうしろに分布する. ところで異形態 '(N)가-i-'と '(N) | -i-'は表記上の問題であり, ローマ字で表せば, すべて '(N)ji-'であり, 区別されない. それ故形態素は //(N)이-i-//となる. そうならば異形態 '(N)Ø-'は //(N)이-i-//が '이'や 'j'で終る名詞のうしろで脱落するものと説明し得る.

### 3.2.1.2. 子音音素(流音音素を含む)で終る語幹の形態素

15世紀朝鮮語の活用語幹に存在する語幹末子音音素群としては //X nj, ㄷ rg, ㄹ rm, ㄹ rβ, ㄹ rh, ㄹ mc, ㅃ bs, ㅅ sg, ㅆ sd//がある. このうち //X<sup>ㄹ</sup> -rβ-//類語幹の形態素を除けば, 残りの語幹末子音音素群を持った語幹の形態素設定は単一子音音素で終る語幹形態素の設定と同じである. ここでは //X<sup>ㄹ</sup> -rh-//類と //X<sup>ㄹ</sup> -mc-//類の語幹に限って形態素設定を行うことにする.

#### 4//X<sup>ㄹ</sup> -rh-//類

次の(8)に提示されたものは '슬-surh-'(哀)の活用形である.

- (8) 슬터라 surtəra<杜初 19: 25b>, 슬코 surko<杜初 10: 11b>, 슬허도 surhədo<金三 2: 5b>, 슬흐며 surhomyə<月釋 10: 24a>, 슬<sup>ㄴ</sup>니 sur-nnəni<楞嚴 2: 9b>, 슬<sup>ㅅ</sup>하 sur-sseβa <龍歌 9: 44a>

これらの活用形を分析すれば, '슬터라surh-dəra, 슬고, surh-go 슬어도surh-ədo, 슬으며surh-omyə, 슬<sup>ㄴ</sup>니surn-nəni, 슬<sup>ㅅ</sup>하sur-sseβ-a'となる. その結果語幹の交替形 '슬- surh-, 슬<sup>ㄴ</sup>-surn-, 슬<sup>ㅅ</sup>-surs-'が抽出される. これらの交替形を共通部分を基準として束ねれば '슬sur{h, ㄴ, ㅅ}'となる. {} 中の交替音素は '3.2.1.1. 3//X<sup>ㄹ</sup> -h-//類'で(5)の活用を示す語幹 //ㄴ-nah-// (産)の語幹末形態音素の交替音素と同じである. それ故, 語幹末形態音素 //ㅎh//が交替音素 /ㄴn/と /ㅅs/となるものは //ㄴ-nah-//の形態音素 //ㅎh//が交替音素 /ㄴn/と /ㅅs/となるものと同じなので, それについての説明は形態素 //ㄴ-nah-// の設定で行った説明から推す. それでは(8)の活用

を示す語幹の形態素は //ㄹ-*surh-*//となる。15世紀朝鮮語で //Xㄹ-*rh-*//類に属する活用語幹の形態素は (9)の如くである。

- (9) //X ㄹ-*rh-*//類: //ㄹ-*surh-*//(哀), //굶-*gorh-*//(餓), //끓-*gurh-*//(沸), //잃-*irh-*//(失), //앓-*arh-*//(痛), //핥-*harh-*//(舐), //서끓-*səgurh-*//(噴), //솟끓-*sosgurh-*//(沸), //붓닿-*bosdarh-*//(煎), //글닿-*gurtarh-*//(沸煎) 等 //ㄹ *rh-*//で終るすべての語幹. .

### 5//Xㅁ ㅁ -*mc-*//類

次の (10)に提示されたのは ‘ㄹ-*umc-*’(縮)の活用形である。

- (10) ㄹ디 *ums-di*<釋譜 19: 7a>, ㄹ는가 *ums-nənga*<楞嚴 2: 40b>, ㄹ처 *umcə*<楞嚴 2: 40a>, ㄹ으며 *umcumyə*<楞嚴 2: 41b>

これらの活用形を分析すれば, ‘ㄹ-디*ums-di*, ㄹ-는가*ums-nənga*, ㄹ어*umc-ə*, ㄹ으며*umc-umyə*’となる。その結果語幹の交替形 ‘ㄹ-*ums-*’と ‘ㄹ-*umc-*’が抽出される。これらの交替形を共通部分を基準に束ねれば, ‘ㄹ*um*{*h, s, c*}-’となる。前に提示した形態素設定の一般原則㉑を適用すれば, 語幹が子音音素で終るので, 暫定形態素は語尾の頭の母音音素の前で分析された語幹, 即ち 즉 ‘ㄹ-*umc-*’となる。それ故 //*c*//が異なる交替形で交替音素 /*h, s*/で実現することは語幹末の形態音素 //*c*//が語尾の頭の子音音素の前で平音(摩擦音)音素化したものと説明し得る。従って (9) の活用を示す語幹の形態素は //ㄹ-*umc-*//となる。15世紀朝鮮語で //Xㅁㅁ-*mc-*//類に属する活用語幹は文献でそれ以上発見されない。

### 3.2.2. 母音音素で終る語幹の形態素

この時期に語幹末で終る母音音素としては //이*i*, 오*o*, 으*v*, 아*a*, 우*u*, 으*u*, 어*ə*, 여*yə*, 애*ai*, ऐ*əi*, 예*yəi*, 외*oi*, 왜*oai*, 위*uəi*, 위*ui*, 의*ui*, 으*vi*//がある。形態素設定の一般原則㉒を適用すれば, 母音音素で終る語幹は語尾の頭の子音音素の前で分析された語幹を暫定語幹として, その暫定形態素において他の交替形の実現は的確に説明され得るならば, それが形態素となる。

上に提示された語幹末母音音素で終る形態素の中で母音音素で終る形態素の中で語幹末形態音素 //으*v*//と //으*u*//は変動を見せるのが多数あるが, 残りの語幹末の形態素はほとんど変動を見せない。例えば (10) で提示した語幹の形態素を示す事にする。

- (10) ア. //X 이-i-//: 소기디 sogidi, 소기<sup>느</sup>니 soginēni, 소겨 sogyø, 소기며 sogimyø (詐)  
 カ. //X 오-o-//: 싸호더니 ssahodēni, 싸호게 ssahogəi, 싸화 ssahoa, 싸호며 ssahodəi (鬪)  
 サ. //X 우-u-//: 기들우디 gidtur'udi, 기들우고 gidtur'ugo, 기들워도 gidtur'uədo, 기들우니 gidtur'uni(待)  
 タ. //X 애-ai-//: 보내더라 bonaidəra, 보내<sup>느</sup>니 bonainēni, 보내야 bonaiya, 보내며 bonaimyø (送)

(10ア-タ)の活用形を形態分析すれば, (11)の如くである.

- (11) 아. //X 이-//: 소기-디sogi-di, 소기-<sup>느</sup>니sogi-nēni, 소기-어sogi-ə, 소기-며sogimyø (詐)  
 카. //X 오-o-//: 싸호-더니ssaho-dēni, 싸호-게ssaho-gəi, 싸호-아ssaho-a, 싸호-며ssaho-myø (鬪)  
 사. //X 우-u-//: 기들우-디 gidtur'u-di, 기들우-고 gidtur'u-go, 기들우-어도 gidtur'u-ədo, 기들우-니 gidtur'u-ni(待)  
 타. //X 애-ai-//: 보내-더라 bonai-dəra, 보내-<sup>느</sup>니 bonai-nēni, 보내-야 bonai-ya, 보내-며 bonai-myø (送)

(11)의 분석 결과, (11ア-タ)で各々の語幹 ‘소기-sogi-’, ‘싸호-ssaho-’, ‘기들우-gidtur'u-’와 ‘보내-bonai-’가抽出される. これらの語幹は交替形を持たない. 従ってそれ自体が形態素となる. 言い換えれば, (10ア-タ)の活用を見せる語幹の形態素は各々 //소기-sogi-//, //싸호-ssaho-//, //기들우-gidtur'u-//와 //보내-bonai-//となる.

### 3.3. 複合形態素

3.2では15世紀朝鮮語活用語幹の単一形態素設定について論じた. 3.2で論じられた形態素はたいてい2つから3つの交替形を実現するものだった. そしてその交替形の実現が共時的な音韻規則で説明し得るものであった. それ故形態素の設定が特別に問題とはならなかった.

그 しかし活用語幹の単一形態素設定とは異なり, 複合形態素の設定は簡単ではない. 複合形態素を構成する異形態素から導き出されるではないからである.



しかしここで複合形態素と認めなければならないものをいくつか選んで構造形態論を対比して論ずることにする。論議の対象となるものを提示すれば、(12)の如くである。

- (12)ア. ① *부수디* *bɛzɛdi*<月釋 21: 219b>, *부아* *bɛza*<法華 3: 89b>, *벗아* *bɛs-a*<法華 3: 86b>, <sup>7)</sup> *부수며* *bɛzɛmyə*<法華 1: 223a>(碎)
- ② *므르디* *mɯrɯdi*<釋詳 13: 4a>, *므르고* *mɯrɯgo*<法華 4: 87a>, *므르며* *mɯrɯmyə*<月釋 17: 11a>, *므러도* *mɯrrɛdo*<法華 2: 216a>(退)
- カ. ① *시르디* *simɯdi*<月釋 17: 13b>, *시르고* *simɯgo*<釋詳 19: 33b>, *시르며* *simɯmyə*<月釋 18: 82a>, *시르샤* *simɯsya*<月釋 11: 20b>(植)
- ② *심거도* *simgɛdo*<月釋 21: 144b>, *심고미* *simgomi*<法華 7: 129b>, *심고디* *simgodei*<月釋 21: 180b>, *심곤* *simgon*<釋詳 13: 36a>(植)
- サ. ① *니를오* *nirur'o*<法華 4: 71b>, *니를에* *nirur'ɛi*<月釋 序: 19b>, *니를며* *nirurmyə*<月釋 15: 42a>, *니를리라* *nirurrira*<法華 4: 161b>, *니르르샤* *nirurusya*<月釋 17: 30b>(至)
- ② *니르디* *nirudi*<法華 2: 184a>, *니르게* *nirugɛi*<釋譜 19: 38b>, *니르며* *niruyə*<月釋 14: 46a>(至)

(12)の例についての安秉禧(1978: 31-42)の論議は次の如くである。まず(12ア①)について、*부수* *-bɛzɛ-*は子音で始まる語尾の前に現れ、母音で始まる語尾、即ち *‘-아-*, *-오-o’* 野前では末母音が脱落して *‘벗* *-bɛz-*’に交替するとした。そして(12ア②)について、母音で始まる語尾の前での語幹交替が(12ア①)の例と同じだが、*‘므r’*がもう一つ添加される異形態を持つものとして、そのような交替が音韻論的に説明されるとした。一方(12カ)について、*‘시르* *-simɯ-*’は子音で始まる語尾の前に、*‘심* *-simg-*’は母音で始まる語尾の前に現れるとした。

安秉禧(1978)によれば、3.2. からここまでが音韻論的に制約された (=決定される) 異形態についての記述である。これとは異なり、形態論的に制約された (=決定される) 異形態についての記述があり得るが、15世紀朝鮮語にはそのような異形態は一般的な語尾と統合する *‘녀* *-nyə-*’に対して *‘-거* *-gə-*’とのみ統合する *‘니* *-ni-*’(行)が対逸なものだが、*녀* *-nyə-*も、*‘녀거든* *nyəgədtun*’で見るように、*‘-거* *-gə-*’と統合するので、形態論的に制約された異形態を持った形態素はないと見た。

(12サ)は語幹双形の例である。(12サ①)と(12サ②)の異形態 /*니를* *-nirur-*/と /*니르* *-nirur-*/は子音で始まる語尾の前では似た比率で現れるが、母音で始まる語尾 //*어* *-ə//*や //*오* *-o//*の前では /*니를* *-nirur-*/だけが現れる。そして *매개모음을* 媒

介母音を持った語尾である ‘-시- -si-’ の前では /니르-nirru-/と /니를-nirru-/がみな現れるが, /니를-nirru-/が優勢であるとした. これらの異形態は同じ意味を持っているので, 語幹 ‘니를-nirru-’と ‘니르-nirru-’が共存するもと見るとした.

ここでも異形態交替と音韻環境についての論議だけをするのみであり, それらの異形態についての形態素設定についてはいかなる論議もない.

このような構造形態論とは異なり, (12)の資料を生成形態論の観点から論ずれば, 次の如くである. まず (12 ア①)の活用形を見ることとする. 提示された活用形を分析すれば, ‘부스-디 beze-di, 부스-아 bez-a, 부스-아 bes-a, 부스-며 beze-myə’となる. ここで語幹の交替形 /부스-beze-/と /부스-bez-/、/부스-bes-/が抽出される. 語尾の頭の ‘아a’ の前で分析された /부스-bez-/と /부스-bes-/は表記の違いだけであり, 同一であるとし得るので, そのうちで /부스-bez-/を択んで交替形 /부스-beze-/と /부스-bez-/を共通部分を基準として束ねると ‘부스-bez-{<sup>ㄹ</sup> e, Ø}-’となる. { } 中の交替音素の実現を説明し得る形態音素があるならば, 2つの交替形を道日しだすことを説明し得る形態素を設定し得る. 2つの交替音素のうちで ‘<sup>ㄹ</sup> e’を形態音素だとするならば, 語尾の頭の ‘아a’ の前で ‘<sup>ㄹ</sup> e’が脱落するのはこの時期の共時的音韻規則で説明し得る. ‘//골과 gorpe』 아 a// → /골과 gorpa/<月釋 20: 43a>, //골과 gorpe』 음 om// → /골품 gorpom/<南明 下: 2b>’이나 ‘//ㅌ te』 아셔 asya// → /타셔 tasyə/<金三 5: 38b>, //ㅌ te』 오디 odei// → /토디 todei/<杜初 19: 31b>’でそのような事実を知ることができる. これとは異なり, 形態音素を ‘Ø’ とするならば, 語尾の頭の子音音素や ‘으u’ の前で ‘<sup>ㄹ</sup> e’が挿入される事実をこの時期の共時的音韻規則で説明し得る. それ故 (12 ア①)の活用を見せる語幹の形態素は //부스-beze-// となる.

次に (12ア②)の活用形を見ることとする. 提示された活用形を分析すれば, ‘므르-디 murru-di, 므르-고 murru-go, 므르-며 murru-myə, 므르-어도 murru-ədo’ となる. ここで語幹の交替形 ‘므르-murru-’と ‘므르-murru-’が抽出される. そのうちで ‘므르-murru-’は語尾の頭の子音音素や ‘으u’ の前で分析されたものであり, ‘므르-murru-’は語尾の頭の ‘어ə’ の前で分析されたものである. このような分析の結果は前に提示した形態素設定原則の適用対象となる. それ故交替形 ‘므르-’は語尾の頭の子音音素の前で分析された語幹の末母音音素と同一の母音音素を持たなければならないので, 語幹は ‘므르-murru-’とならなければならない.

従って2つの交替形 ‘므르-murru-’と ‘므르-murru-’を共通部分を基準として束ねれば, ‘므르-murru-{<sup>ㄹ</sup> e, 으u}-’となる. ところで { } 中の交替音素の内 ‘Ø’を形態音素とすれば, 語尾の頭の ‘어ə’ の前で ‘으u’となることを共時的音韻規則で説明し得ず, ‘으u’を形態音素とすれば, 語尾の頭の前で ‘으u’が削除されることを共時的音韻規則で説明し得ない. これは2つの交替形が語彙化した異形態ということ語ってくれ

る。従って (12ア②)の活用形を見せる語幹の形態素は //물mur{Ø-ɾr-}으-//となる。

形態素 //물mur{Ø-ɾr-}으-//は語彙化した異形態 //쁘르-muru-//と //물르-murru-//を包括する複合形態素であるが、これらの異形態は音韻部の基底形 //X-//に音韻規則が適用されて導き出されるものではなく、語彙部に適用されて通時・意味部で句節構造規則の適用の結果として基本文の形式が決められた後に語彙挿入規則が適用される時に語彙選択規則によって選択されるものである。言い換えれば、語尾が ‘으’ や子音音素で始まる場合はその前に //쁘르-muru-//が選択され、語尾が ‘어’ や ‘오’ で始まる場合はその前に //물르-murru-//が選択されるのである。そうしてその結果が音韻部に来て規定形 //쁘르murru ] (으)CY// や //물르murru ] {어,오}Y//となるのである。

今 (12カ)を見ることにする。そのうち (12カ①)の活用形は ‘시므-디simu-di, 시므-고simu-go, 시므-며simu-myə, 시므-샤simu-sya’ と分析し、(12カ②)の活用形は ‘שמ-어도sing-ədo, שמ-오미sing-omi, שמ-오ᵀsing-odei, שמ-온sing-on’ と分析する。その結果交替形 ‘시므-simu-’ と ‘שמ-sing-’ が抽出される。文法形態 ‘며-myə’ と ‘샤-sya’ は ‘머그며məguumyə<法華2: 189b>, 노ᵀ며nogemyə<月釋8: 16a>’ や ‘머그샤məgusya<法華7: 67a>, 노ᵀ샤nogesya<法華7: 61a>’ を分析した ‘먹-으며məguumyə’ と ‘먹-으샤məg-usya’ で見るように、‘으’ で始まるものである。それ故交替形 ‘시므-simu-’ は語尾の頭の子音音素や ‘으’ の前で実現し、交替形 ‘שמ-sing-’ は語尾の頭の ‘어’ や ‘오’ の前で実現される。これらの交替形を共通部分を基準として束ねれば、שמsim{ɾg, 으}-’ となる。ところで { } の中の交替形のうちどれか一つを形態素とする場合、もう一つの交替音素が導き出されることを適切に説明し得る共時的音韻規則がこの時期には存在しない。この事実は2つの交替形がすべて語彙化した異形態ということを語ってくれる。それ故 (12カ)の活用を見せる語幹の形態素は //שמsim{ɾ-으g-우}-//と表示される。この複合形態素を構成する語彙化した異形態も通時・意味部で語彙選択規則によって選択された後にそれらが音韻部の基底形となる。

最後に (12サ)を見ることにする。そのうち (12サ①)の活用形は ‘니를-오nirur-o, 니를-에nirur-əi, 니를-며nirur-myə, 니를-리라nirur-rira, 니를-으샤nirur-usya’ と分析され、(12サ②)の活用形は ‘니르-디niru-di, 니르-게niru-əi, 니르-며niru-myə’ と分析される。その結果語幹 ‘니를-nirur-’ 과 ‘니르-niru-’ が抽出される。ところで (12サ①)の活用形 ‘니를-오nirur-o’ と ‘니를-에nirur-əi’ の語尾 ‘-오-o’ と ‘-에-əi’ は語幹末の //ɾr// の後ろで ‘-고-go’ と ‘-게-əi’ の //ɾg// が脱落したものだから、それらの活用形は語幹と子音音素で始まる語尾と統合したものである。従って語幹 ‘니를-nirur-’ と ‘니르-niru-’ は語尾 ‘-(으)CY’ の前で対立して分布する。従来このような語幹を「語

幹双形」または「双形語幹」と呼んだ。

ここで「語幹双形」という名称についても再考の必要がある。この名称は単純に表面形の分析と分類を目的とする構造言語学の観点と15世紀の文献語が同質的という観点から付けられたものと考えられる。しかし単語が深層構造で表面構造を経て実現されると見る変形文法論の観点からは次の2つで説明し得る。1つはそれらの語幹を同じ話し手が止揚すれば、それは語幹としては「複数語幹」としなければならない。言い換えれば、形態素としては「複数形態素」としなければならない。言い換えれば、現代朝鮮語で同じ話し手が共時的な発話で使用する‘마끼-maggi-’(<말기-matgi-使任)と非公式な発話で使用する‘매끼-maiggi-’のようなものであり、同じ話し手の語彙部にその2つの語幹形態素が共存するのである。もう一つはそれらの語幹を同じ社会に属する他の話し手が止揚するなら、「方言語幹」または「方言形態素」となる。言い換えれば、現代のソウルでソウル中心の中部方言の話し手が使用する‘끓-ggurh-’(沸)と慶尚北道の東海岸地域からソウルに移住した話し手が使用する‘끓-ggurg-’(沸)のようなものである。前の語幹形態素は‘끓는다ggurrunda, 끓ggur{코ko, 쿠ku}, 끓러도ggurædo’のように活用し、後の語幹形態素は‘끓는다ggurrunda, 끓고ggurggo, 끓거도ggurgædo’のように活用する。それ故語幹‘니를-nirur-’と‘니르-niru-’が複数形態素ならば、その2つの形態素が同じ話し手の語彙部に//니르niru{ɾ,∅}-//のように入っているものと見なければならず、その2つの語幹が異なる方言の話し手が使用するものならば、その2つの語幹は互いに異なる話し手の語彙部に//니를-nirur-//や//니르-niru-//として別に入っているものと見なければならぬ。

#### 4. 結論

今まで筆者は15世紀朝鮮語の活用語幹について、構造形態論を土台として論じた安秉禧(1959/1978)を生成形態論の観点から検討し、そこに現れる問題点を生成形態論の観点から論ずることによって朝鮮語形態論の継承と発展に寄与しようとした。論じられた内容を整理すれば次の如くである。

安秉禧(1959/1978)について、第1の指摘は15世紀活用語幹の共時形態論に、その時期の共時的な形態論とし得ない派生語幹や複合語幹について論じているということである。「派生」や「複合」はそれらの語幹が形成される方法に関する名称であり、共時的には1つの語幹である。ところでそれらを「派生」や「複合」以前の状態で分析し、論ずるのは共時的事実に関するものではない。しかし「派生語幹」や「複合語幹」を分析し、論ずることを共時的形態論と見るのは研究者の誤りではなく、構造形態論が持っている問題で



ある。

安秉禧(1959/1978)についての2つ目の指摘は活用語幹についての形態論なのに活用語幹の形態素設定についての論議がないということだった。語幹によっては“알-ar- $\omega$ 아-a-”(知)(p.13), “장-jəh- $\omega$ 것-jəs- $\omega$ 진-jəd-”(怖)(p.19)のように、異形態を羅列して2つの異形態の間に‘ $\omega$ ’を入れて異形態が音韻論的に決定されることを知らせる形態素を提示してはするが、そのような形態素の設定についての論議はない。勿論構造形態論では形態分析で抽出された異形態が音韻論的に決定される場合は2つの異形態の間に‘ $\omega$ ’を入れて形態論的に決定される場合は2つの異形態の間に‘ $\omega$ ’を入れて形態素を /( $\omega$ b $\omega$ c) $\omega$ d $\omega$ e/と表示するか、その中で代表となる異形態を1つ選択して { } の中に入れて基本形 {a} を形態素として表示する。

このような構造形態論においてはとは異なり、形状としての言語が通時・意味部から音韻部を経て実現されるという変形文法論の観点を受容する生成形態論では、交替形や異形態がその前段階の形態素から抽出されるものと見る。それ故構造形態論で設定される形態素としては交替形や異形態が導き出される過程を説明し得ない。氏かかつて生成形態論は交替形や異形態が導き出される過程を適合性をもって説明し得る形態素を設定するのである。

安秉禧(1959/1978)についての第3の指摘は語彙化した異形態の性格を理解し得なかっただけでなく、それらについての形態素設定や形態素表示をし得ないということである。例えば、‘므르디murudi, 므르며murumy $\omega$ , 물러도murrado’(退)の活用を見せる語幹形態素は“므르-muru- $\omega$ 물르-murrr-”と表示し、これらの異形態が実現される活用形だけを提示したりとか ‘시르디simudi, 시르며simumy $\omega$ , 심거도simgado, 심고심simgoni’(植)の活用を見せる語幹形態素は“시르-simru- $\omega$ 심-simg-”と表示し、異形態‘시르-simru-’と‘심-simg-’は各々子音音素と母音音素で始まる語尾の前に現れるという叙述で終る。このような構造形態論はそれらの異形態がどんな性格のもので、それらがどのような過程を経て導き出されるかを説明し得ない。また語幹 ‘니를-nirur-’(至)と ‘니르-nirru-’(至)は語尾 ‘-( $\omega$ ru)CY’ の前で対立して分布するとして「双形態語幹」とだけし、それについての説明をしていないままである。

これとは異なり、生成形態論は先の2つの形態素を構成する異形態は単一形態素からは抽出され得ないので、語彙化した異形態と認め、それらは語彙部に貯蔵されなければならないと見る。そしてそのような異形態が導き出される形態素を複合形態素 //물mur{ $\emptyset$ - $\omega$ -r} $\omega$ -ru-//及び //심sim{ $\neg$ -g- $\omega$ ru}-//と表示し、語彙化した異形態は通時・意味部で語彙選択規則によって選択された後に、それらが音韻部の基底形となると説明する。そして ‘니를-nirur-’(至)と ‘니르-nirru-’(至)を「双形態語幹」とすることについてもその2つの語幹を同じ話し手が使用すれば、それは語幹としては「複数語幹」であり、形態素とし

ては「複数形態素」として、同じ話し手の語彙部に間蔵されているものと見なければならず、各々異なる話し手を使用するならば、それらの語幹は互いに異なる「方言語幹」または「方言形態素」としなければならず、互いに異なる話し手の語彙部に貯蔵されているものと見なければならぬ。

### 【注】

- \* この論文を書くのに Yi Jinho イ・ジンホ・Choe Yeongseon チェ・ヨンソン・Yi Sujin イ・スジン・Son Hanbich ソン・ハンビッチ(2015)が大きな助けとなったことを明らかにし、この場を借りて著者たちに感謝をささげる。
- 1) 許雄(1964:152-156)は「使動派生接尾辞」と「使動形」、「他動派生接尾辞」と「他動形」のように呼び方を変えることを提案している。‘[[**ㅅ**berg] 이-i-]> 불기-bergi-’や‘[[**ㅁ**merg] 이-i-]-> 물기-mergi-’で見るように、派生接尾辞 ‘-이-i-’は形容詞語幹と統合して他動詞を形成するからである。筆者もその提案が適当と考えるが、混乱を避けるために従来用語をそのまま用いることとする。
- 2) この時期は (1カ)の語幹と同一のものと見ることのできる ‘더레이-dərai-’(穢)もある。この時期に ‘에’は j で終る二重母音音素であるから ‘더레이-dərai-’は ‘더러이-dərai-’であり、‘더레이-dərai-’と大きく違わなかったものと見られる。 [例] 더러여 dəraiya <杜初 3: 7b>, 더러이리라 dəraiirira <杜初 17: 13b>.
- 3) 活用語幹に被動接尾辞 ‘-이-i-’が統合して合成された被動詞 //눌이-nur-i-//(<누르-nuru-壓), //빨이-bsdir-i-//(<빨르-bsdiru-刺), //걸이-gər-i-//(<걸-gər-掛)等も共時的語形成過程によって形成されなかったものであることはそれらが各々 //눌리-nurri-//, //빨리-sdirri-// または //빨리-bdirri-//, //걸리-gərri-//に変わった事実から理解し得る。
- 4) このような事実を考慮すれば、朝鮮語史や中世朝鮮語、近代朝鮮語等各時代の共時的朝鮮語文法を論ずるのに「造語論」を論ずるのも適当ではない。そして朝鮮語の多くの単語は派生と合成によって合成されたものが多いのだが、アメリカの「生成音韻論」を受容して、そのような単語を共時的語形成過程で説明しようとする朝鮮語についてのアメリカ式の生成形態論の論議も適当ではない。
- 5) ここには //ㄴs//と //스j//が除かれているが、それはこの時期にそれらの音素で始まる語尾が存在しなかったためである。一般に語幹末の //ㄷ// の後ろで語尾の頭の //으//は脱落する。そうすると、先語末語尾 ‘-으시--uusi-’の場合、語尾の頭の ‘으’の脱落の後でさらに //ㄴs// 野前で語幹末の //ㄷ//が脱落し得る。しかしこの時期に尊称の先語末語尾 ‘-으시--uusi-’の ‘으-’だけは脱落し

ない.そして‘살씨니sarssini’の場合‘ㄹss’の前で‘ㄷr’が削除されないが,この時の‘ㄷr’は,形態分析で見ると,語幹末の//ㄷr//ではなくて,連体形語尾‘-을-ur’の‘ㄷr’である.この場合‘ㄷr’が脱落しないのは朝鮮語で//ㄷr//脱落が一般に形態素の境界に限定されるためである.単語の境界で先行する単語末の//ㄷr//が次の単語の頭の//ㄹs//の前で脱落する‘부손buson(<[[불bur][손son]]⇒부손buson’のような例があるが,このような例は例外と言える.

6)此の事実を考慮すれば,活用形で語尾の頭の子音音素の前にある‘ㅎ’は実際に平音(破裂音)化した‘ㄷ’で表示されなければならないだろう.

7)形態素//부ㅅbeze//と語尾//어-a//が統合すると,語幹末の//ㅇe//が脱落すればその結果は/부ㅅbeza/となる.ところで語幹と語尾を分離したのは語幹が//ㅅz//で終わったのではないということ,言い換えれば,音韻過程によって語幹末の母音音素が脱落したものであることを読者に知らせ,文脈を易しく理解させるための表記上の問題だと考える.

(菅野裕臣訳)

## 参考文献

고영근(2010),『표준 중세국어문법 (3판)』,서울: 집문당

김완진(1972),“형태론적 현안의 음운론적 극복을 위하여”,『동아문화(서울대)』11. pp. 273-299.

박용찬(2016),「15세기 국어 활용 어간의 형태론적 교체 양상: 안병희(1959/1978)를 중심으로」,<한국어문교육연구회 제208회 전국학술대회> 발표 논문.

송철의(1992),『국어의 파생어형성 연구』,서울: 태학사.

안병희(1959),“15세기 국어의 활용어간에 대한 형태론적 연구”(서울대 대학원 석사논문). 안병희(1965),“제3장 문법론”,국어학개론(강좌),어문학연구회 편,서울:수도출판사. pp. 108-146.

안병희(1967),“한국어발달사 중: 문법사”,한국문화사대계 V(언어·문학사),고려대 민족문화연구소. pp. 167-261.

안병희(1978),『15세기 국어의 활용어간에 대한 형태론적 연구』,서울: 탐출판사.

안병희·이광호(1990),『중세국어문법론』,서울: 학연사.

이기문(1961),국어사개설,서울:민중서관.

- 이기문(1972), 『개정 국어사개설』, 서울: 민중서관.
- 이진호·최영선·이진숙·선한빛(2015), 『15세기 국어 활용형 사전』, 서울: (주)박이정.
- 전상범(1995), 『형태론』, 서울: 한신문화사.
- 최명옥(2009), 『현대 한국어의 공시 형태론(2쇄)』, 서울: 서울대학교 출판문화원.
- 최명옥(2015), 「16세기 한국어의 동사어간에 대한 공시형태론」, 언어와 정보사회 26. pp.1-38. 허웅(1964), 「서기 15세기 국어의 사역·피동의 접사」, 『동아문화(서울대)』 2. pp. 127- 166.
- 허웅(1975), 『우리 옛말본-15세기 국어 형태론』, 서울: 샘 문화사.
- Aronoff(1976), *Word Formation in Generative Grammar*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Aronoff and Anshen(1998), “Morphology and Lexicon: Lexicalization and Productivity”, In A. Spencer and A. M. Zwicky (eds)(1998). pp.237-271.
- Aronoff, Mark and Kirsten Fudeman(2005), *What is Morphology?*, Blackwell Publishing.
- Bauer, L.(1994), “morphology”, In R. E. Asher and J. M. Y. Simpson (eds), *The Encyclopedia of Language and Linguistics* Vol. 5, Oxford. New York. Seoul. Tokyo: Pergamon Press. pp.2543-2553.
- Beard, Robert(1998), “Derivation”, In Andrew Spencer and Arnold M. Zwicky.(eds)(1998). pp.45-65.
- Bloomfield, L.(1933/66), *Language*, New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Bybee(1985), *Morphology*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 이성하·구현정(역)(2000), 『생성형태론』, 서울: 한국문화사.
- Chet, C. & R. Hudson. (2004), “Inflection Morphology in Word Grammar”, In F. Katamba (ed.), *Morphology vol. 1*. London & New York: Routledge. pp.441 -467.
- Halle(1973), “Prolegomena to a theory of word-formation”, *Linguistic Inquiry* 4, pp.3-16.
- Joseph, Brian D.(1998), “Diachronic Morphology”, In A. Spencer and A. M. Zwicky (eds)(1998), pp. 351-373. Matthews(1991), *Morphology*, Cambridge Univ. Press.
- Nida, E. A.(1946/49), *Morphology: The Descriptive Analysis of Words*, The University of Michigan. 김진형(역)(2000), 형태론: 『단어의 기술적 분석, 대우학



술총서 481, 서울: 아카넷.

Scalise, Sergio(1984), *Generative Morphology*, Foris Publications. 전상범(역)(1987), 『생성형태론』, 서울: 한신문화사.

Spencer, Andrew(1991), *Morphological Theory: An Introduction to Word Structure in Generative Grammar*, Blackwell. 전 상범.김영석.김진형(역), 『형태론, 서울: 한신문화사.

Spencer, Andrew and Arnold M. Zwicky.(eds)(1998), *The Handbook of Morphology*, Blackwell.

Stump, G. T. (1998), "Inflection", In A. Spencer and A. H. Zwicky (eds)(1998). pp.13-43.

